

"I had gone to bed Henry Jekyll, I had awakened Edward Hyde."

Robert Louis Stevenson

「私はヘンリー・ジキルとして眠ったのに、目が覚めたらエドワード・ハイドだった」 ロバート・ルイズ・スティーヴンソン

前回のスティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』の続きです。

ジキル博士はハイドに変身して行った悪の行為を償うために いっそう善行を積むようになって、社会的な評価を高めました。

けれども、そのうちに悪の部分が増大して、薬を飲まなくてもハイドになるようになりました。ジキルになって寝たのに、朝はハイドになっているのです(表題の言葉)。次第にジキルに戻るのが難しくなるのに気がついて彼は罪の意識にさいなまれ、もう決してハイドにはならないと決心して 実験室の裏口の鍵を捨ててしまいました。

それからひたすら身を慎みますが、ある日公園でうたた寝をしている間に変身が起きました。玄関には召使がいるし、鍵がないので裏口からも入れません。そこでジキルはホテルに隠れ、友人のラニオンに、実験室からある薬の箱を持ち出して ラニオンの家に置いてもらいたいと手紙で頼みました。そうしてジキルはハイドの姿で彼の家に行き、目の前で薬を調合し変身して見せたのです。医師としての使命感の強いラニオンは恐怖に身を震わせ、人間として到底許すことのできない行為であるとジキルを非難しました。ラニオンはショックのために衰弱し、アタソン宛てに一部始終を書いた遺書を残して死にました。

ジキルも体がすっかり弱ってきて、眠っているうちに薬が切れればハイドになるため、眠ることもできなくなりました。薬も残り少なくなり、薬を求めて叫ぶハイドの声に、召使は「博士が殺されたい」とアタソンに助けを求めてきました。アタソンが実験室のドアを破って中に入ってみると、部屋の真ん中でダブダブのジキルの服を着たハイドが死んでいました。ジキルがハイドから逃れる方法はもう死のほかなかったのです。

こうしてジキル博士は悲惨な最期を遂げました。

実際の物語は、まずアタソンの立場から周囲で起こる不思議な事件が語られてサスペンスを深め、最後にラニオンの遺書とジキル博士の告白書によって 真相が暴かれるという形をとっています。

この物語には実在のモデルがあるということです。エディンバラ職業組合会長で市議員にもなったウィリアム・プロディという人物で、彼は仲間と20年間も泥棒をしてついにつかまり、死刑になりました。スティーヴンソンはこの事件に非常に興味を持ったらしく、この物語を書く前にプロディを主人公とする劇を親友との合作で上演しています。

スティーヴンソンの父は厳格なカルヴィン主義者で、息子に対する教育はたいへん厳しいものでした。青年時代スティーヴンソンは、自分には多分にハイド的な性格があることに気づきますが、幼少からの宗教教育の影響から逃れられず、苦しむことになったようです。そうしたことから、人間の心に住む性格の二重性に特に注目するようになったのでしょう。「普段は理性によって抑えられている悪の面が表面に出ると、二重人格というレッテルを貼られるが、人間は本来二重人格なのだ」とジキルは告白書の最初に書いていますが、スティーヴンソン自身の心の中の葛藤がそのままジキルの中に投影されて、生き生きしたジキル像ができあがったものと考えられます。「ジキルとハイド」が二重人格の代名詞となったほど この物語がいまでも全世界の人に愛読されているのは、これが娯楽としての作品であるだけでなく、人間の本性を鋭く描き出しているからでしょう。

